

どこのだれ？

真野 信治

はじめに

今年二月の研究発表で細川藤孝の出自の謎を取り上げました。出自が謎とされる明智光秀のお友達であった細川藤孝も同様に出自に疑問があることを述べました。ほぼ、ご清聴いただいた通りですが、発表時間の制限から、割愛せざるを得ない部分もありましたので、それらを補填しつつ、演題を完結させたいと思います。

一. じゃあ藤孝って

「どこのだれ？」

出自に疑問がある藤孝って、じゃあ「どこのだれ？」ということになりませんが、発表した通り、佐々木氏流大原氏出身の細川刑部少輔晴広の養子であったことはほぼ間違いないと思います。現在の細川家がある熊本以外ではほぼ認知されてきたようだと、

複数の専門家は話しています。ただ、当時の肥後熊本藩細川家では、紆余曲折を経て、藤孝の実父は三淵氏であるが、養父は和泉上守護家の細川刑部少輔であるとの結論に達し、それを幕府へ提出します。すなわち、和泉上守護職細川兵部少輔藤孝がここに誕生したわけです。藤孝の没後三十年はたっていました。この結論に達した経緯の裏には、徳川幕府の二大系図集成編纂事業（『寛永諸家系図伝』と『寛政重修諸家譜』）の存在と、それへ提出すべき系図作成に翻弄された藩の担当者苦悩が存在したのです。まず寛永年間、藤孝の子孫及び肥後細川家は、幕府より藤孝の出自がなんであるかを求められました。その時の藩主の祖父である忠興などの証言記録が残されています。それによると、藤孝の養父は「刑部少輔」と称し、その父は「伊豆守」であったということです。しかし「伊豆守ってどこのだれ？」、「刑部少輔ってどこの刑部少輔？」という疑問が、担当者を悩ませます。そして、刑部少輔は和泉国の上守護であった細川氏が名

乗っていた事実を突き止め、半ば強引に藤孝の養子先としてピックアップしてしまっています。ただ、刑部少輔はこれでなんとか目途が立ちましたが、伊豆守については最後まで特定することができませんでした。現在では、伊豆守がどこの誰かは比定出来てはいるのですが、ある理由があつて解明できなかったらしいことがわかってきました。

二. 細川伊豆守って

「どこのだれ？」

この肥後熊本藩細川家の「藤孝の養い親探し」は、非常に苦労した形跡が見受けられます。息子の忠興と、昔から細川家に仕えるばあやが「伊豆守」という人が藤孝の祖父に当たる、と証言したのですが、その人物をどうしても見つけることが出来ず、『寛永諸家系図伝』には不確実な系図を載せてしまっています。当然この系図中の養い親（刑部少輔元有）は正しくはありませんでした。藤孝の生まれる前の時代、つまり戦国前期に「細川伊豆守」という人が史料上から確認できなかったのでしょうか。こ

の「伊豆守って、どこのだれ？」状態は江戸期を通して継続し、約二百年後に編纂された『寛政重修諸家譜』でも、刑部少輔を元有から元常へ訂正できたとはいえ、本当の養い親を掲載させることは出来ませんでした。この問題は、明治期になっても改善はされていません。時代は下つて、二〇〇一年、東京大学史料編纂所の設楽薫氏が、『龍安寺文書』内に埋もれていた史料から、藤孝の父と思われる刑部少輔晴広を見つけ、さらにその父が伊豆守高久であることも特定します。ようやく伊豆守が「どこのだれ」かが判明したのですが、そこからさらに先代の大原政誠が細川氏を名乗ったことまでもわかりました。やはり我々が住む情報化社会は素晴らしいものがあります。

三. 「入名字」というしくみ

設楽氏は、足利義晴時代の將軍側近に関する論考で、この伊豆守とその父であった細川政誠の出自を解明し、その動向に言及しながら幕府内の立場について詳細を述べています。さすが

に、史料編纂所のような、大量

の史料群に囲まれていると「どのだれ」だかわからなかった伊豆守の正体はいとも簡単に暴かれてしまうのです。では、何故肥後細川家の編纂担当者は、ここにたどり着くことが出来なかったのでしょうか？もちろん藤孝の没後三十年近く経ってからのクエストであったこともその理由のひとつですが、室町期のある時期に特化したイレギュラーな仕組みの存在に気が付かなかったことが影響しているのかもしれない。その仕組みとは、主に足利義政の時代に盛んに執り行われた「入名字」という慣習に近い制度です。すなわち「幼童（喝食）の頃より義政の側近であった者を、元服後に偏諱と共に足利一門の名字を与え、一門に加える」という仕組みです。但し、同時に名門足利一族の事跡をも継がせていることは、義政時代に限つての特徴といえるでしょう。約二百年前のことなので、ピンとこなかったのでしょうか。

四、「なんちゃって」

細川氏の成立

この制度により、佐々木流大原氏の庶男であった喝食の寿文房は義政の寵臣となり、元服後に細川姓を与えられ、治部少輔政誠と名乗ります。足利一族であり、三管領のひとつと言われた名門細川氏の血族ではなく、いわゆる「なんちゃって」細川氏の成立です。さらに着目すべきは、同時に政誠が細川氏庶流の淡路守家を継ぎ、御部屋衆となったことです。この御部屋衆とは、特に家柄にとらわれず単に將軍が身近に置きたいと思つた側近を引き立てただけのものですが、淡路守家は、室町幕府の家格秩序から言うところの御供衆という実質的に機能する家格なのです。次いで子の伊豆守高久は、將軍義晴の内談衆になりますが、高の字は前將軍義澄（始め義高と名乗っていた）からの偏諱です。したがって、その子の晴広も義晴から一字をもらつており、藤孝も同様であります。代々將軍家から一字拝領をいたされた一族であり、いわば側近中の側近だったわけでありませぬ。し

たがって、それほどマイナーな一家ではなかったようにも思えます。ただ、この淡路守家から出た藤孝が、和泉上守護家を継ぐということが本当にあったとすれば、下剋上の世であっても、かなりの話題性を生じた出来事になったかもしれない。この「なんちゃって」細川氏の存在に気が付かなかつた肥後細川家の担当者ですが、多分、話に出ていた「刑部少輔」のみに注目してしまつたのでしょう。なんと2ラック上の国持衆である和泉上守護家の「刑部少輔」を養ひ親と断定してしまつたのです（或いは断定せざるを得なかつたとも考えられます）。最終的にこの決定事項が、現在の細川氏出自の定説として信じられているわけです。面白いです。

五、「なんちゃって」は

細川氏だけではない

実は、同じく足利一族である一色氏・畠山氏・上野氏などにも同様の「なんちゃって」が存在します。一色氏の例をあげれば、細川政誠と同様に義政の喝食であつた上杉教朝（上杉禅秀

の子）の子である七郎は、元服後に一色式部少輔政熙と名乗りますが、足利一族の名門一色氏とは縁もゆかりもない人物です。その政熙が、若狭守護家の血を引きながら、三河国の分郡守護であつた一色持範の跡を継ぐことになりました。当然、同族内では、いきなり出現した政熙に対し、「どこのだれ？」となつてしまふのです。但しこの件は、持範の実子である政照（政熙と政照が似通つている）が継いだと言ふ説もありますので、確定的なものではありません。が、その次世代が政具という人物であることは確実で、政具も「入名字」を受けたことが同時代史料に見えているので、逆にこの政照と言ふ人物の方がひょっとして別系統の一色氏なのかもしれません。ところで、大原氏と違い、上杉氏は当時東国でかなりの威勢を誇つていました。その為か、七郎は一色氏を名乗ることに難色を示したとも言われています。このことから、好んで「なんちゃって」一族になりたい奉公衆ばかりではなかつた状況も見えてくるのです。因みに、初期徳川政

権で活躍した僧の金地院崇伝はこの政具の曾孫にあたります。

六、「入名字」は

將軍一代限り？

このように、將軍義政の命により名字を与えられた人たちはありますが、『蔭涼軒日録』には、義政没後の代替わりに当たって「皆名字を剥がされて、元の名字に復した」という記述があります。となるとこの「入名字」は、將軍一代限りのものであったのかもしれませんが、このことが、後世まで詳しく伝わらなかつた原因である可能性も考えられます。但し細川氏のみはその姓を名乗り続けたようです。ひよっとすると將軍からの命である「入名字」の習わしは、將軍から近習へという事象だけではなく、守護大名もその臣下に対して同様のことを施していた可能性もあります。室町末期に守護大名と同姓の家臣が多く見受けられるようになるのもこの「入名字」のケースが守護家レベルにも浸透していたのかもしれませんが。

おわりに

わたしは数十年近く中世武士団の武家系図を追いかけていますが、未だその旅の終わりは見えません。今回この演題を取り上げたのは、有名一族の系譜にいきなり身元不明の人物が出現し、これって「このだれ？」という状況に何度も出くわしたからにすぎません。しかも、ちゃっかりとその名門家の跡を継いでいるという事実にも困惑していました。始めのうちは、「入名字」という慣習について、しっかりと把握できていなかったので、思わず考え込んでしまいました。ただ、このようなレアなケースも徐々に解明していくと、それはそれで楽しく真実に迫れるのだと感じながら探求を続けています。

最近では、かの有名な上杉氏の初期の系譜部分、平将門を討った藤原秀郷が出たいわゆる魚名流藤原氏の系譜に疑問を感じたりしています。特に上杉氏は、定説では藤原氏一門である勧修寺家に繋がっているとされています。その中で、足利尊氏の実母がこの上杉氏の出身で

あったことから、それ以降、一気にトップシーンに登場した一族でもありません。但し、それ以前、つまり尊氏以前の時代についての系譜に多少の疑問点を感じており、永い間、下調べをしてきました。ほんとうに勧修寺家の血脈であるのか、または別の氏族が絡んでくるのか、今後ともことん追求するつもりではあります。が一方で、違和感のある系図を追い詰めても、力及ばず、ほとんどが中途半端で終わってしまうのも現状です。というのは、まだまだ中世における一次史料が少なく、一般化されていないことがその原因の一つとされます。せつかく類を見ない貴重な系図を発見しても、その傍証史料を使って説明できない限り、それは妄想的系図で終わってしまいます。やはり一次史料での傍証は重要であり今後この手法は変わることはないでしょう。

〔参考〕

設楽薫「足利將軍が一門の「名字」を与えること」『姓氏と家紋』第56号

